

座談會

むかし話となつた娘義太夫



娘義太夫——銀杏がへしに花かんざしが揺らいで、派手な色ものの肩衣に白粉と口紅の艶めかしさが唄ふ「今ごろは半七さん……」だつた往年の「娘義太夫」も、時代の激流に、今日ではもう見る蔭もなくうらぶれ

てしまつたが、これもその晴やかな昔おもへば、明治情緒のリリシズムとして懐かしまれる——そこで、そのころの夢のやうな思ひ出の美しさを三蝶、昇之助、仙平の皆さんにも一度あたたかく愛撫してもらつた——

出席者

竹本三蝶
豊竹昇之助
豊澤仙平

〃九月下旬

大阪文楽座貴賓室〃

呂昇の偉さ

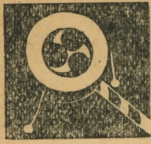
——私たち大阪生れのものに、娘義太夫といへば、先づ誰よりも逝くなつた豊竹呂昇を思ひ出すんですかね……

昇之助 そら、何んといふても呂昇はんだす。呂昇はんが大阪の娘義太夫をあれだけのものにしはつたんですさい……

——現在の人で、呂昇のことを一番よく知つてゐるのは？

三蝶 東廣さんあたりでしたやろが、もう死にはつたし……

昇之助 呂之助はんがよく知つてはります。私は「昇」の字を一字もらひましたが、呂昇師匠については、あまり知りません。東京に長くゐてましたので……



——呂之助も、昔は若手の美人で、随分人氣がありましたね、もう逝くなりませんでしたか？

昇之助 伊勢の松坂に

ゐてはるさうだす。

——昔の呂昇の藝風を、あなた方から見て、どうお考へでせうか？
仙平 とにかく、色氣のある藝でした

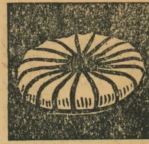


左から 三蝶・昇之助・仙平

な……
昇之助 花やかな藝風でした。それが一般にウケたのです。
三蝶 私は呂昇はんで一番えらいと思

ふのは、あの方が時代を見る眼、時代の移り變りに眼先きの見える人やつたことだす。昔から、大阪では若い娘さんで、あんまりキリヨウのよくない子は大概「この子、不細な顔やさかい髪結さんか、娘義太夫にしようか」といつたものですが、それを呂昇師匠は、これからの娘義太夫が人氣を取るには、どうしてもキリヨウのよい娘ばかり、藝よりも顔を先づ問題にせんといかん、といふ主義でした。これが見事に當つたんだす。眼先きが見える賢しい人やつた。これが一番呂昇さんの偉いところやと思ひます。

仙平 垢抜けのしたサラツとした藝でしたな……それにあの色氣、これだけは誰も眞似手がおまへん。わけて、あの口上があつて御廉が上つて、キユツと三味線を構へはつた時の色氣、これが堪まらん、とよく男のお客さまが評判してはりました。とにかく呂昇さんはあんな綺麗でえゝ顔してはりましたが、御簾が上つた瞬間になんともいへぬ色氣がおましたんですな、えらいものや思ひます。



昇之助 それに、とて
も心掛けのえゝ人で、
手紙の字もよく書きは
りましたし、息子さん
の教育にもなか／＼氣
をつけてはつたし、東
京の伏見の宮さん、小
松の宮さんあたりへもよく御出入りし
てはりました。交際も上手な人で、ほ
んまにヤリ手でした。

仙平 呂昇さんのパトロンは大阪より
東京に多かつたんやおまへんか……

呂昇の色氣

——あれほど美人でしたが、男女
關係の點は？……

三蝶 そら、なか／＼ありました。い
つぞや新派の花柳さんや大矢さんが呂
昇はんの若い時分の好きな人のお芝居
しはつたことありましたな……（註・
新生新派所演「呂昇物語」）あれでは
最初の人とうまく行かなんだやうやけ
ど……

仙平 一時は三代目の越路太夫さん
と、なか／＼浮名を流しはつた……そ

れに、いつも旦那はんを大事にする人
でな、ちよつと旦那はんが風邪引きは
つたいうても、氣を使うて心配しては
りました。情の深い人でした……

三蝶 晩年は阪急沿線の夙川にゐては
りましたが、旦那はんが歸つて來はれ
へん晩はえらい御機嫌が悪い。そのか
はり歸つて來はつた晩は子供のやうに
喜んで、ソワ／＼してはりました。

（笑聲）

昇之助 とにかく旦那はん孝行の、情
の深い人やつたのはたしかです。

三蝶 呂昇さんはたしか五十七歳で逝
くなつてはりますが、その年まで、何
やかやと噂のあつたのは、やはり氣性
が若い人やつたと思ひます。なんせ、
あんなべつびんさんやつたさかい……

仙平 サツクばらん、親切ごゝろの
あるえゝ人でしたな……

昇之助 藝人はいくら年齢とつても、
いつまでも若い氣でゐないかんといふ
主義で、始終、身なかりかて若づくりだ
したが、巡業の旅先きで、お弟子さん
に髪を梳かせてはるの見てましたら、
もう何いふても、五十歳以上だすよつ

て髪の手が抜けて少うなつてゐます。
それでお弟子さんがその少ない髪の根
元をギョツと握つて梳いてはつたら、
えらい怒りはつた。少なくなつた髪の
毛でも、なるべくよさん（澤山）あ
るやうにフワリと握つて梳いてくれん
と、自分の氣持まで老けて來る。とい
ふのだす。それで今度はまるで若い人
の髪の手を持つた心づもりで、片手に
握り切れんといつた手つきでフワリと
持つて梳くと御機嫌が直つて、ニコニ
コしてはりました。（笑聲）

——なるほど、それは如何にも呂
昇らしくていゝ話ですな……

「松の席」の一座

——呂昇の晩年は主として松屋町
の「松の席」に出てゐましたね……

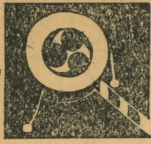
仙平 「松の席」が呂昇はんの根城だ
した。別に常打ちやないので、巡業に
もよく出てはりましたが、一般には
「松の席」のことを松屋町の「呂昇の
席」といはれてゐたほどだす……

——「松の席」の廣さと、當時の
一座は？

仙平 わり合ひに廣うおました。あれで千日前の「播重」の席よりもまだ奥行が深うて、定員は六七百ぐらゐでしたやろか……語りよい小屋でした。三蝶 一座は雛駒はん、末虎はん、喜昇はん、は昇はんあたり……だしやろか。まだぎよさん（澤山）ゐてはりました。

——「松の席」よりも、娘義太夫の最後の席は千日前の「播重」ぢやなかつたのですか？

三蝶 「播重」は中途で浪花節の定小屋になつてゐまして、また一時娘義太夫に變りましたが、ノツケ（最初）だけパツとお客がついただけで、やつぱりあきまへんでした。それがてうど昭和の初めごろでしたやろか……それからあととは浪花節ばかりになつてました。

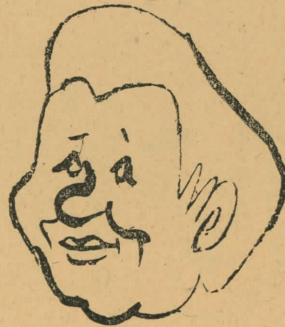


仙平 「播重」は演り難い小屋でしたな。昇之助 あれは奥が悪うおまんねん。舞臺のうしろが、直ぐ煉瓦堀になつてましたやろ、

あれが狭うていけまへん。三蝶 客席を取れるだけ取つて無理しでありましたさかい……

「播重」と「竹横」

——私たちの知つてゐるのは「松之席」か「播重」程度ですが、そのほかにも定席があつたのでせうね……



竹本三蝶

昇之助 ありましたとも……娘義太夫の盛かんなところは……先づ「播重」に列んで千日前では「春木亭」これは後に三遊クラブになりました。それから今の大劇（大阪劇場）のある溝之側にも一軒、なんとかいふ小屋で……仙平 道頓堀では辨天座の西横丁にもおました。それ、辨天座の西隣がネル

屋はんで、そのネル屋の西を南へちよつと這入つたら、小さい小屋が二つ、東西に向ひ合つておました。東側の席が新内の席で、西側の席が娘義太夫の席でした。竹田の芝居（辨天座）の横といふ意味から、この小屋をみな「竹横」というてました。

昇之助 そや、わても「竹横」で語つたことある……

三蝶 それから北では淨正橋の「此花館」北の新地の「永樂館」それから西では新町の「飄亭」

仙平 新町の「飄亭」は夏場の涼み淨瑠璃だけに行つたものでした。

三蝶 このうち、娘義太夫としては、「此花館」が一番長續ぎしてましたやろ一番最後まであつたと覺えてゐます。

仙平 「竹横」の向ひの新内の席は早うにつぶれて「竹横」だけ残つてたと思ひます。久國はん、國松はん、組助はんあたりで、なか／＼やかましくいふてたものですよ……

——随分と小屋も多かつたのですね、ちよつと今日からは想像されぬほど……それから、昇之助さん



は東京に長くゐら
つしやつたさうで
すが、東京と大阪
と比較して……

東京は顔が第一

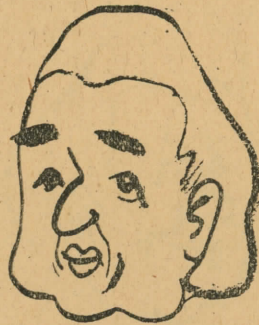
昇之助 わては日露戦
争のあとで、東京へ行
きました。十六の時や思ひます。こ
い言ふと私の年齢が判つてしまひます
けど(笑聲)……それから三十歳ぐら
ゐまであちらにゐましたが、その頃は
東京もえらい流行つてました時代で小
屋も澤山おました。まア今思ひ出して
も本郷の「若竹」茅場町の「宮松」芝
の「翠平」四谷の「きよし」上野の
「立花」浅草の「東京亭」……この六
つの席を「むつみの席」というてまし
たが、このほかにまだまだ沢山ありまし
た。そして、これらの席はみんな一ヶ
月のうち十五日間は娘義太夫で、残り
の十五日間は色ものをかけてまし
たら、娘義太夫の全盛時代でした。そ
れで私なども一つの席から次ぎの席へ
人力車で掛け持ちしたものでした。

娘義太夫は東京と大阪とどち

らが盛んでしたでせうか？

仙平 どちらも大はやりでしたが、や
つぱり東京のほうが一倍さかんやつた
かも知れまへん。

昇之助 東京の娘義太夫さんは、大阪
の娘義太夫さんより、ズツとべつびん
さんが大勢をられましたな……東京は
どちらかといへば顔が第一でした。髪
に花かんざしを挿して、半玉さんみた



豊竹昇之助

いに綺麗でした。

昇之助 その時分の東京では小精さ
ん、小土佐さんの全盛でした。小土佐
さんはまだ達者でゐります。

三蝶 なんというても、小精さんは東
京の大御所でした。大阪から東京へ行
つても、みな小精さんのところへ挨拶
に行つたものです。

小清・小土佐・素行

昇之助 小清さんの語りものは漉いも
のが得意で、鰻谷、布引の三段目、忠
臣藏九段目などよろしうおました。美
人といふはうやおまへんでしたが、男
のやうな大きな身体で、舞臺ヘデー
ンと坐られたら、立派なもので、自然と
位がついてました。とにかく、東京の
女義界の大御所でした。

仙平 小土佐はんは美人で、鈴みたい
なえい聲でした。

昇之助 私が始めて東京へ行つた時
分、「宮松」の高座で芝居の名題試験
のやうなものがおまして、客席に男の
太夫さんや小土佐さんなどがズラリと
列んでは、その前で語つたもので、
今なら却つて気がさして、あきまへん
やろが、まだその時分は子供のことや
から、一向にこはいことがわからず案
外、平氣で語りまして、試験もどうや
ら及等したやうでした。その時分、私
の三味線を姉の昇羽が弾いてましたの
で、「昇之助、昇羽」で賣込んだもの
でした……

仙平 そのほか素行さんも有名でした
な。

昇之助 素行さんはお医者さんの奥さんで、いつも「揚巻」にクル／＼結うて上品な方でした。この方の娘さんが、有名な日向きむ子さんです。

仙平 蛇好きで有名でしたな、日向きむ子さんといふ方は……

昇之助 お母さんの素行はんがきむ子さんのお宅へ行きはつたら、銀色の蛇がチヨロ／＼ときむ子さんのあととかつて出て来たのは、如何に母親でもゾツとして、といはれました。それに、ある晩泥棒がはいつたが、蒲團の中から蛇が鎌首をもたげてゐたので、びつくりして逃げ出したといふ話もおます……

仙平 小精さんは渾名を「おたぼはん」とかいひましたな。

昇之助 それはツト(たぼ)がとても大きかつたからでつしやろ……(笑聲)

——東京は三味線が別でしたか、弾き語りでしたか？

昇之助 大抵みな弾き語りでした。……とにかく、そのころの東京は學生さんまで、みな「どうする」で、そら一時はほんまにえらい景氣のものでした。娘



義太夫やないと夜も日も開けぬ時代でした。今から考へると全く夢のやうな氣がします。そのころこんなことがおりました。お客さんがみな下足札を持つてはりますやろ、それをサワリの聞きどころになると、チヨン／＼と叩きはりますねん。例へばチンチン、チチンといふところへ、チンチンと弾くと、チヨン／＼と叩きはる、これでは次ぎの三味線が弾けまへん。人氣がようてお客の大入は嬉しいがこんなのは困りました。

全盛時代はいつ

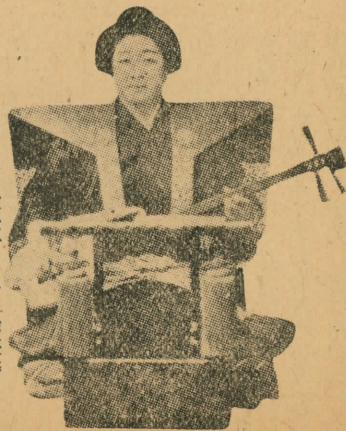
昇之助 なんべんもいひますけど、東京の娘義太夫はみな綺麗でしたな……描ひの島田に結うたりして……

三蝶 東京は藝より顔のとこでした。小仙 大阪は顔より藝を大切にしたらとこやといへます。

昇之助 東京はみな長い袖で、鬘司目の着附でした。頭は中年増が銀杏返しに束髪、若手が唐人髻と決つたものでした。

昇之助 東京の小土佐さんは播重へも來はりましたな……小精さんは一ぺんも大阪へ來やはらなんだけど……

——娘義太夫の全盛期は？



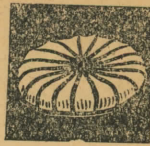
故豊竹呂昇の舞臺姿

仙平 まあ、日露戦争の明治三十六七年から大正の始めまででしたやろ……三蝶 米騒動のあつた大正七、八年ごろはまだ盛んでしたが、大正十年ごろからポツ／＼衰微れて來たのやおまへんか。

仙平 もつとも、その時代でも、地方巡業(旅興行)はなか／＼盛んでしたけど……

昇之助 米騒動の時分には既に「竹横」はなくなつてゐたのと違ひますか？

三蝶 とにかく、大阪では呂昇さん時代が一番娘義太夫の流行つた時代で、その意味でも呂昇さんといふお方は幸



福な人やと思ひます。今日の私たちは時代がこんな時代になりましたのやから、娘義太夫やいふても、人が相手にしてくれはりません。それを無理に賣物

にして、この時代遅れの「藝」を看板にもり立てて行かうといふのやから、苦勞ばかりで、少しも報ひられるところがない。呂昇さんのやうなえゝ時代に生れ合しはつた人は幸福です。今日の私たちは苦勞ばかりで、不仕合せなものやと、つくづく考へさせられます。

——「播重」全盛時代のお話をも少し續けて下さいませんか。

仙平 あのころは晝夜二回興行でした。晝が午前十時から、夜が五時ごろからでしたか。

三蝶 東京は昔から一日一回でしたか。

御祝儀が二十銭

昇之助 東京は一回興行、夜だけでしたな。

三蝶 「播重」は暮の大晦日の晩まで

やつてました。その大晦日がよろしいつてな……それに十二月の十四日には「忠臣藏」が出る吉例でした。みんな役をつけて貰ふのが嬉しうて……

仙平 「播重」が盛んなころは、二階へ上る表の段梯子にまでお客さんがギツリ鈴なりに坐つてはつて、通ることも、御不淨へ行くことも出来まへなんだ。そら、エライ景氣で、てうど今の寶塚の少女歌劇みたいな騒ぎでしたけど……

三蝶 その時分は、お客さんから高座へ祝儀が出ました。一人ゴヒイキが出しはると、競争でまた一人出しはるといふ具合で、高座に御祝儀が一杯になりませぬ……それを一つ／＼お茶子はんが客席から高座へ持つて來るので、そのお茶子はんが客席の中をウロ／＼するのが邪魔になつて、語られへんほどでした。もちろん、そのころのことやさかい御祝儀いふても、二十銭か三十銭でしたか……（笑聲）

仙平 そのころの御祝儀は、包紙にせずむき出しでしたので、まるで高座がお寺のお賽銭箱か、橋の上の乞食みたいで、それが嫌やので、みんなで相談して、御祝儀は大入袋へ入れて貰ふことになりました。

昇之助 御祝儀といへば、この間、淡路の市村へ巡業に行つた時、おもしろおましたな。田舎のお百姓の成金さんでつしやろ。ツカ／＼と高座の上へ上つて來やはつて、大きな皮の財布から百圓札をそのまゝつかんで、何枚も舞臺へ列べはつたの……（笑聲）ちよつと、近ごろ珍らしいことでした（笑聲）

——そのころの木戸銭は？

三蝶 たしか木戸は下足の預り賃とも十銭でした。それが正月や盆の紋日になると、十五銭になつてました。（笑聲）

——ホウ、随分安い時代ですね……三蝶 そのほかに、中銭として蒲團代やお茶代が二銭ほどでした。

「前髪」時代の修業

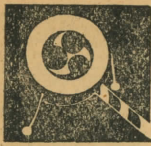
——そのころの修業はどうでしたか。

仙平 やつぱり私どもの知つてゐるころは「播重」が修業の道場でした。みんなこゝに集つてました……最初の勉強時代は「前髪」いひまして、この時代が内弟子のやうにお師匠はんの使ひ走りから女中のかはりまでやらされま

す。朝九時までに小屋入りして、師匠の見臺や、肩衣の用意を済ませて、それからあちこちのお師匠はんのお宅へ稽古をして貰うて、また小屋に戻つて高座を勤めるのだが、それがなかなか忙うて、よく出番の時間に遅れます。すると、誰々はんがトチリはつたと書き出されますねん。それが辛ううて……

三蝶 そのトチリはつた穴埋めに出してもらうて「あの娘ちよつとよう語る」と認められたもんだす。

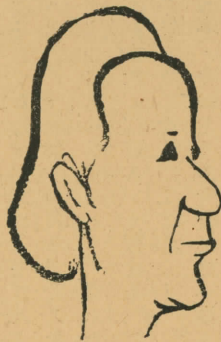
昇之助 とにかく「前髪」といふのが文樂でいふ「大序」でした。そやから自分の出番が済んでも「お先へ」いふて歸れまへん。まだ用事がたんと残つてゐるので、なか／＼風呂一つもゆつくりはいつてる時間がおまへなんだ。「お先へごめんやす」いふて直ぐ歸れるやうになつたら、もう大したもので、一人前でした。



三蝶 今の娘義太夫の面々の中でも、もうこの「前髪」時代の修業をして來てはる人はほんまに少うなりまし

——出番の順は？

三蝶 一番はじめの、落語でいふと「前座」に當るのが「御祝儀」、それから一番しまひが「追出し」それから逆に、その前が「どつさり」「もたれ」「しぼり」その前が四枚目、五枚目、六枚目、七枚目……となつて最初の「御祝儀」になるわけで、一晚に三十段ほども語りますので、よう語りも



豊澤仙平

のが重つて「酒屋」のサワリや「先代」のサワリは一晚に何回も出てましたが、そのころのお客さんは好きな人はばかりやさかい、文句もいはんと辛棒して聞いてゐてくれはりました。昇之助 今の娘義太夫は藝を磨きすぎてますな。昔の娘義太夫はあんなやおまへなんだ。そんな氣がします。

三蝶 ほんまだす。

仙平 それから「播重」はみな三味線が別についてましたが、呂昇はんの一座はみな弾き語りでした。

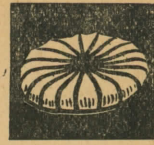
風紀と悲戀物語

——いづれ若い女の藝人衆ばかりだつたから面白い浮名もあつたこととせうね。その時分の風紀問題は？

三蝶 そら若い娘ばかりやから、金持ちの旦那はんの世話になつたり、學生はんの肩入れもおましたけど……：そない心配せんならんほど風紀悪いことおまへなんだ……（笑聲）

仙平 樂屋口などにお客が待つてると、警察がやかましくおましたし、それにみな親たちが心配して、向ひに來てたもんだす……：わけて御亭主のある人は、ちよつと小屋が濟んでから、お客さんのお座敷で御駈走になることも出來まへなんだ。そら昔の娘義太夫といふものはみな親孝行でした……（笑聲）

三蝶 それに、わてらこんな無細工な



顔やさかい、昔からどなたも相手にしてくれはりまへん。……（笑聲）

仙平 それに娘義太夫はんといふものは、みな亭主孝行だしたな……そばで見てたら阿呆かいなと思ふほど、亭主を大事にする人ばかりだした（笑聲）

昇之助 まあ、それでも問題起した人もないことおまへん。あれ、誰やつたか、呂昇はんとこの人で、失戀してキハツ飲んで死んだ人がおましたな……

それから、これも東廣はんのお弟子さんで下駄屋の娘さんやつた人が、女房子のある人、この相手の人も藝人さんで、今でもおはりますが、この人と一緒になつて、その仕末に困り、自分とこの下駄の表に塗るうるしみたいなものを飲んで、これも自殺しやはつたの……

仙平 あの娘、ほんまに溫和しいえ、娘やつたのに惜しいことしました。

——やはり、いろ／＼とあるんですね。（笑聲）……で、今日、娘義太夫といふと大體何人ほど残つてゐますか？

現状とその將來

三蝶 因講の女子部に現在三、四十人ほど名前が出てますし、東京でもまだそれぐらゐは居てはりますやろさかい。まア、東京と大阪とで百人たらずは残つてをりますやろ……盛んな時代は東京にも二百人、大阪にも二百人ほど居りましたものです……

仙平 今のところ大阪では三蝶さんの「娘義太夫と人形の會」が年に二、三回、朝日會館で、公演してはるほか、あまり大阪では演りませんが、旅へはよく出ます。地方ではまだ好きな人が多いので、大變、人氣もよく大入りが続きますね……

——大阪では竹本三蝶さんの孤軍奮闘ですね。

三蝶 この間も、南座での文樂を聞き

はつた人が、出る太夫も出る太夫もお爺さんばかりで一向に氣が變らん。蔭氣くさうて面白くない。あれに娘義太夫を混ぜたら目先きが變つて面白いのに……といふてはりました。まさか文樂さんの中へ混ぜこぜに出るなんていふことは出来まへんが、この話の中に娘義太夫の進む路が見出されるのやないかと思ひます。文樂では味へぬ娘義太夫のハンナリと花やかな舞臺、これだけが頼みの綱だす。これをなんとかうまく興行として目先きを變へて行つたら、もう亡びかけてゐる娘義太夫にも、まだ當分のうちは命があるのやおまへんやろか……

——娘義太夫の現状と將來の見透しについてもまだ／＼お聞きしたいことがあるのですが、もう時間も相當長くなりましたので、一應このあたりで閉會いたします。どうもお忙しい中、有難うございました。